

51番札所・石手寺(いしてじ、松山市)の加藤俊生住職が平和の問題に関心を持っておられるから、会って話を聞くといいのではということだった。

石手寺の住職については、辰濃和男氏が著書『歩き遍路』(海竜社)の中で、住職に会った時の会話を紹介しておられるので一部を引用させていただく。「父は『憲法第九条は仏者の悲願だ』という言葉を残しています。その九条が変えられそうな時代がくるなんて、父は思わなかったでしょうね」。私もお会いして何らかの示唆を受けたいと願っていたが、あいにく不在で面会はかなわなかったが、三重塔から「イラク犠牲者供養」の垂れ幕が下がっているのを拝見した。

愛媛県の札所も大方打ち終え、残り少なくなつた。別格の金山出石寺(きんざんしゅつせきじ)は通常の88カ所遍路みちから大きく離れた標高八百メートル余の山上にある。大洲ユースホステルに連泊、打ち戻ることにした。早朝、宿を出たところで『南海日日』の取材を受け、同紙は後日、写真入りで遍路の動機等を記事にしてくれた。

出石寺を打ち終えたその日の夜は、明日その出石寺を打つという佐賀のSさんに宿の女将さんと娘さんを交えて談論風発、楽しいひと時を過ごした。『南海日日』のある八幡浜市近くの佐田岬半島の三机(みつくえ)湾は、地形が真珠湾に似ているところから奇襲攻撃の予行演習基地になつたと

いう話やら、例の非戦の碑の話を含めて話は尽きることなかった。女将さんは私と同年齢、戦争の体験を若い二人に語り継ぐ話し合いとなり、宿のホームページには市民意見広告運動のそれをリンクして下さつた。Sさんはこれから先、土居の町を通る時、ぜひその碑に立ち寄りたいたと、力をこめて私の手を握つた。

12月27日、宇和島の別格龍光院(りゅうこういん)を打ち、今回の遍路にいったん終止符を打つた。年が開けてから高知県を廻り、3月中旬に結願(けちがん、全札所を打ち終えること、満願)を果たしたいと考えている。

(注1) 札所を参拝することを打つという。板の納め札を釘で打ちつけたことからきているという。

(注2) 四国遍路といえは札所は88カ所であるが、弘法大師ゆかりの霊場は他に数多くあり、札所以外という意味で番外霊場という。この番外霊場のうち20の寺が番外20カ所霊場という札所を作り、これは「別格本山20霊場」と呼ばれている。筆者は今回の遍路で88カ所の他、この20カ所も回ることにした。

(注3) 安藤正楽 1866年土居町の豪農の家に生まれ、1953年同地で没。24歳の時上京、明治法律学校(現明治大学)に学び、30歳の時帰郷。その頃はすでに内村

鑑三に啓発され、非戦の思想をかためていた。38歳で県議会議員に当選。被差別部落の教育問題で活躍し、43歳頃から研究し始めた歴史学の分野でも業績を残した。そのかたわら、詩歌、書画の世界でも非凡な才能を発揮し、多くの作品を残している。時の宰相・犬養毅、与謝野晶子・鉄幹などとも親交があった。出典 正楽の甥、山上次郎著『安藤正楽』(青葉図書、松山市)、山川出版社刊『愛媛の百年』(のづ・いさお、74歳、市民意見広告運動事務局)



遊打
四国遍路の公所巡拝
同行二人

武蔵和信創札所
正楽正楽九葉

一冊一冊
1953年
1953年
1953年

九条実現 へんろ道中記 (その2)

野津 いさお

今度の遍路は11月29日、前回打ち終えた(末尾注1)別格番外(末尾注2)海岸寺(かいがんじ、香川県)から始めた。

多度津(たどつ)駅で各駅停車の電車を待っていると、一人のご婦人に話しかけられた。「おへんろ九条の会ができたのですか」。リュックにつけた「へんろみち保存会」のバッジと「九条実現」のバッジを見てのことだった。阪神震災に遭い、今は粟島にお住まいのMさんで、「最近、島にも九条の会ができ私も入った。お互いがんばりましょう」と手を差し伸べられ、握手をして別れた。札所中、海拔標高差で最も高い位置にある雲辺寺(うんぺんじ)をはじめ、別格の箸蔵寺(はしくらじ)など打ち、6日目には愛媛県に入った。

非戦の碑を訪ねる

市民の意見30の会・東京の吉川勇一さんから「遍路に廻るなら是非この碑を見て来て下さい」と資料を渡されていた。その碑は、四国中央市に合併された旧宇摩郡土居町藤原の八坂神社の境内にあり、遍路みちとは

やや離れたところにある。まずこの碑「日露戦役記念碑」の全文を掲げる。

「日露戦争から凱旋した藤原の軍人諸氏が予に其(その)記念碑の文を請われた其人達は(列記された氏名省略)の三十七氏で内八人は負傷し外近藤嶺吉高石音吉の二氏は討死されたのである。嗚呼(ああ)此(この)部落僅(わずか)に百七十戸それに此多數の人が出て在ったか!今更當時を回想し戦慄せざるを得ぬ。由来戦争の非は世界の公論であるのに事實は之に反して戦は明日にも亦(また)始るのである。吁(ああ)之を如何(いかに)すればよいか他なし。世界人類のために忠君愛國の四字を減すにありと予は思ふ。諸氏は抑(そもそも)此役に於て如何(いかに)の感を得て歸つたのであろう?明治四十年三月 安藤正樂題撰書(丸括弧内は引用者による)」

碑は各地にある忠魂碑とは異なり、帰還した人たちに戦争についてどう思うかと問いかけています。実はこの碑の「忠君愛國の四字を減すにあり」が官憲の目にふれて全文が削り取られ、自然石の碑面は文字の痕

跡をとどめていない。(もつとも、その隣に、24 荒畑寒村が世界に類を見ない平和の記念塔とたたえたことなどを裏面に記した復刻碑が93年に建立されている。末尾に写真)

しかしこの平和と人権の先覚者・安藤正樂(あんどう・せいがく、末尾注3)も地元では意外と知られていない。今回の遍路は、ちょうど臨時国会で教育基本法の「改正」が論議されている時期にあたった。そこで泊まった宿や昼食をとった食堂で正樂の主張を話題にすることも遍路の役目と心得、大いに喧伝これ務めたのである。

松山市、八幡浜市を経て宇和島へ

12日目には松山市に入った。出発に際し、遍路みち近くに在住の意見広告運動賛同者または周辺にある団体に連絡を取ること考えないではなかったが、今回の遍路はあくまで私的なものと割り切り、連絡は一切しないことに決めていた。しかし、これまでの意見広告運動で事務局外スタッフとしてデータを入力する仕事を手伝ってくれた、同市在住の奥田恭子さんに連絡せずに通り過ぎるのはいかにも失礼と思い、携帯電話からメールを入れた。奥田さんからはモーニングサービスのお接待を受けたうえ、しばらくともに歩き、重要なことを聞いた。一つは八幡浜市にある『南海日日新聞』という地方紙に紹介したら取材に応じる意思があるかどうかということ、もう一つは